

2020（令和2）年度 第1回 知床世界自然遺産地域科学委員会

適正利用・エコツーリズム検討会議

議事録

日 時：2020（令和2）年10月15日（木）13：15～17：10

場 所：標津町生涯学習センター あすばる 多目的ホール

<議事>

1. 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況
2. 実施部会等からの報告
 - （1）コロナウィルス感染拡大を受けた知床観光の現状
 - （2）赤岩地区昆布ツアー部会
 - （3）国立・国定公園への誘客・ワーケーション推進事業
 - （4）野生動物観光促進事業
3. 個別部会等からの報告
 - （1）厳冬期の知床五湖エコツアー事業
 - （2）知床五湖地区における取組
 - （3）カムイワッカ地区における取組
 - （4）ウトロ海域における取組
4. その他
 - （1）知床世界自然遺産地域長期モニタリング計画について
 - （2）知床国立公園利用のあり方に関する行政間会議について
 - （3）アドベンチャーツーリズムの推進と世界自然遺産を活用したプロモーションの進捗状況について
 - （4）今後の自然公園制度のあり方について
 - （5）文化観光促進法について
 - （6）知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズム検討会議設置要綱等の一部改訂について

令和2（2020）年度 第1回 適正利用・エコツーリズム検討会議 出席者名簿（敬称略）

委員

北海道大学大学院 農学研究院 准教授	愛甲 哲也
弘前大学 農学生命科学部附属 白神自然環境研究センター 教授	石川 幸男
北陸先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 教授 （座長）	敷田 麻実
北海道大学大学院 農学研究院 准教授	庄子 康
富山大学 人間発達科学部 人間環境システム学科 教授	高橋 満彦
公益財団法人 知床自然大学院大学設立財団 業務執行理事	中川 元
北海道立総合研究機構 エネルギー・環境・地質研究所 専門研究主幹	間野 勉

以上、五十音順

地域関係団体

ウトロ地域協議会 幹事	松本 鉄男
同 事務局	桜井 あけみ
特定非営利活動法人 知床斜里町観光協会 事務局長	新村 武志
一般社団法人 知床羅臼町観光協会 事務局長	若林 育代
知床ガイド協議会	欠席
公益財団法人 知床財団 理事長	村田 良介
同上 事務局長	高橋 誠司
知床自然保護協会	欠席
斜里山岳会 会長	遠山 和雄
同上 事務局次長	笠井 文考
羅臼山岳会 会長	佐々木 泰幹
同上 副会長	涌坂 周一
羅臼遊漁釣り部会	欠席
知床小型観光船協議会 事務局	神尾 昇勝
同上	森 和基
知床羅臼観光船協議会 会長	長谷川 正人
一般社団法人 自然公園財団 知床支部	欠席
知床ウトロ海域環境保全協議会 事務局長	福田 佳弘

以上、設置要綱記載順

関係行政機関

斜里町 総務部 環境課 課長	南出 康弘
同 自然環境係 係長	吉田 貴裕
同 産業部 商工観光課 課長	河井 謙
羅臼町 産業創生課 課長	大沼 良司
同 産業創生係 係長	藤本 茂典
同 まちづくり担当課 課長	石崎 佳典
国土交通省 北海道運輸局 観光部 次長	水口 猛

事務局

林野庁	北海道森林管理局 計画保全部 計画課 課長	佐野 由輝
同	北海道森林管理局 計画保全部 計画課 自然遺産保全調整官	伊藤 俊之
同	北海道森林管理局 網走南部森林管理署 署長	館 泰紀
同	北海道森林管理局 網走南部森林管理署 森林技術指導官	佐々木 英樹
同	北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 署長	松本 康裕
同	北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 森林技術指導官	吉岡 英夫
同	北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 所長	小田嶋 聡之
同	北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 専門官	早川 悟史
北海道	環境生活部 環境局 自然環境課 自然公園担当課長	小島 宏
同	環境生活部 環境局 自然環境課 主査	澤井 尚美
同	経済部 観光局 AT調整 主査	石塚 隆浩
同	オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 知床分室 兼 根室振興局 保健環境部 環境生活課 主幹	吉澤 一利
同	オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 係長	永井 秀和
同	オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 主事	伊藤 勝利
同	根室振興局 保健環境部 環境生活課 技師	小椋 智世
環境省	釧路自然環境事務所 所長	田邊 仁
同	釧路自然環境事務所 国立公園課 課長	松尾 浩司
同	釧路自然環境事務所 国立公園課 係員	森田 由女花
同	釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 国立公園保護管理企画官	渡邊 雄児
同	釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 係員	山田 秋奈
同	釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 国立公園利用企画官	湯原 敦子
同	釧路自然環境事務所 羅臼自然保護官事務所 自然保護官	高橋 すみれ

運営事務局

公益財団法人 知床財団	保護管理部 部長	石名坂 豪
同	羅臼地区事業部 部長	中西 将尚
同	企画総務部 公園事業係 係長	秋葉 圭太
同	羅臼地区事業部 公園事業企画係 係長	坂部 皆子
同	企画総務部 公園事業係 主任	金川 晃大
同	事業支援室 主任	新藤 薫

※1. 議事概要の記述において、発言者の敬称・肩書等は省略しての記載とした。行政関係者の所属については、一部略称を使用した。

※2. 文中、WG はワーキンググループの、ML はメーリングリストの、それぞれ略称として使用した。
また、適正利用・エコツーリズム WG はエコツーリズム WG、適正利用・エコツーリズム検討会議はエコツーリズム検討会議、知床世界自然遺産地域科学委員会は科学委と略して記した。

開会挨拶・資料確認 等

山田：これより 2020 年度第 1 回知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズム検討会議を開催する。はじめに環境省釧路自然環境事務所長の田邊からご挨拶申し上げます。

田邊：地域関係団体の各位にはご多忙のところご参集に御礼申し上げます。また、委員の皆様におかれては午前の WG から長時間にわたるご参画に感謝申し上げます。今回の適正利用・エコツーリズム検討会議は、知床の世界自然遺産としての資質を後世に引き継ぐために最重要な課題である適正な利用とエコツーリズムの推進について、地域の皆様の意見を伺う非常に重要な場であると考えている。本日の会議では、まず新型コロナウイルスが知床の観光に与えた影響に係る報告を共有する。また、実施部会・個別部会の実施状況、アドベンチャーツーリズム等の今後の見通しについても報告をいただく。会議は 3 時間を予定している。忌憚のない意見交換をお願いして、挨拶に代える。

山田：本日は、座長・委員は全員出席である。石川委員は Web での参加であるため、発言は必ずマイクを通していただきたい。配布資料は資料一覧の通りである。また、今回から国土交通省北海道運輸局に関係行政機関として参画いただく。これに伴い、設置要綱の改定を資料の 4-4 と資料の 4-5 に記しているので、ご承認いただきたい。以後の進行は座長にお願いする。

敷田：昨年度のこの会議では全く予想していなかったが、コロナウィルスの感染拡大とその対策のため、社会環境が一変した中での今回の会議開催となった。こうした大きな環境変化の中でも、知床の自然の価値を高めていくという我々の努力は手を休めることができない。ご参集の各位には、各回の議論の積み上げが結果につながっていくという認識のもと、本日も積極的な議論をお願いしたい。その上で、毎回の依頼事項を今一度繰り返す。この会議は極力自由に発言していただく場であるが、参加人数が多いため、共通の資源である時間を有効に使うという観点から発言時間にはご配慮を願う。各参加者の発言は、基本的に名簿に記載された所属組織を代表するものと捉えさせていただく。そうではなく個人的な見解である場合は、それが分かるようにしていただきたい。この会議は、何らかの決定をする場であると同時に、議論を重ねる場でもある。批判的な意見をぶつけ合うのではなく、一段階も二段階も上の答えを目指すべく互いの意見を調整して、創造的に議論をする場にしていただきたい。

開会に先立ち、事務局から紹介のあった国土交通省北海道運輸局から一言ご挨拶を頂戴する。昨年度までオブザーバーとして臨席いただいたが、今年度から関係行政機関に加わっていただく。本日は観光部次長の水口氏にお越しいただいている。

水口：北海道運輸局観光部次長の水口である。国土交通省には、開発局など様々な部署があるが、東京に拠点を置く観光庁の、北海道における出先機関が北海道運輸局観光部だにご理解いただきたい。外国人の誘致、観光地の磨き上げなどを専門に手掛ける部署である。自身は本日が初めての参加となる。よろしく願う。

敷田：他の省庁、環境省や林野庁と同様、国土交通省、観光庁には観光分野を代表して参画いただく。本日まで出席の水口氏は、事業者などからの信任も厚い方と聞いている。今後、色々な相談にも応じていただけることと思う。

議 事

敷田：ここからの進行は座長の私が手掛けるが、本日は Web でご参加の石川委員を含め全ての委員が参加される。議事も多岐にわたるので、議事進行に協力を願う。

まず、昨年度第 2 回の検討会議は悪天候のために参集できず、関係する組織・団体には資料一式が送られた。確認の上、意見等があればお寄せいただくこととしたが、まず、それについて事務局から報告をいただく。

高橋（環境省）：昨年度第 2 回のエコツーリズム検討会議については、敷田座長の説明の通り書面開催とさせていただいた。その後、関係各位から意見・コメントは寄せられなかったことを報告申し上げる。

敷田：報告の通り、送付した資料に関係各位からの意見等はなかったとのことだ。承認プロセスを経たわけではないので、実質的に前回会議は休止、今回の議論が前回に代わることになる。お手元の参考資料 3 が、昨年度 9 月に開催された第 1 回の会議で協議された内容と議論の要約版である。簡単に振り返る。

「1. 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況」に続き、「2. 実施部会からの報告」として、赤岩地区昆布ツアーの続く 2 年の継続、公開されているツアーの名称については変更をすることで合意した。「3. 個別部会等からの報告」では、「厳冬期の知床五湖エコツアー事業」について、ゲート管理によって一般車両の進入は防げること、今後も適正なゲート管理は可能であるという説明で合意した。「知床五湖地区における取組」については、立入認定者数やヒグマ遭遇回数などが報告された。「カムイワッカ地区における取組」も報告である。「ウトロ海域における取組」では、「海のハンドブック」の改訂を検討しているという新規話題が提供された。「4. その他」では、まず「長期モニタリング計画」について、内容や進捗を報告した。次の「国立公園の利用のあり方に関する懇談会」について、参考資料 3 には「2019 年度中に検討の状況を本会議に報告」とあるが、これは今回の報告に代えさせていただき、議論に付す。最後、「知床

国立公園の区域と計画の変更について」は、技術的な問題を含むいくつかの内容について説明があった。

以上が昨年 9 月 30 日に開催された第 1 回エコツーリズム検討会議の議論の内容である。これに関して何かご意見、あるいは補足などあればお願いしたい。特になければ、具体的な議事に入る。北海道から説明を願う。

1. 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況

・資料 1 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況 ……北海道・吉澤が説明

敷田：説明に対し、質問やコメント、補足などあれば承る。知床羅臼フットパスクラブから観音岩 COAST WAY フットパスコースの提案が取り下げられ、それ以後は新規提案がないまま今に至っている。

質問等がなければ次へ進む。次は「実施部会等からの報告」だが、コロナウィルスの感染拡大が知床の観光に与えた影響等の現状を共有した上で通常の部会報告に入る。まず斜里町から、続けて羅臼町から報告を願う。

2. 実施部会等からの報告

(1) コロナウィルス感染拡大を受けた知床観光の現状

・資料 2-1① コロナ禍の知床観光の現状について コロナ禍による斜里町観光への影響と対策事業 ……斜里町・河井が説明

・資料 2-1② コロナ禍の知床観光の現状について コロナ禍による羅臼町観光への影響と対策事業 ……羅臼町・石崎が説明

敷田座長：斜里町及び羅臼町から、コロナウィルス感染拡大による影響とその対策、今後の取り組みの方針について報告をいただいた。斜里町は、従来から取り組んでいるブランディングを利用して、観光客とコミュニケーションをとりつつ感染防止対策を推進する、中長期的な方向性については、今のところ修正等はないとお考えとのことだ。羅臼町は、主力の観光船が 5 割という非常に大きい落ち込みが確認されたが、7～8 月は回復基調に転じたとのことだ。今後の観光運営の方針としては、両町とも誘客促進など従来の対策を継続するとのことである。質疑応答に移る前に、北海道運輸局から道内の観光の状況、国の観光ビジョンの改定も準備されていると聞き及ぶので、可能な範囲でコメント等をいただけないか。

水口：道内の状況を少々紹介する。斜里町の説明に用いた資料（資料 2-1①）にグラフがあるが、道内の観光客の入込もほぼ同じ曲線で推移している。2 月の末に緊急事態宣言があり、道内の観光客数は全国を上回る勢いで減少傾向に転じた。その後、5 月に底を打ち、7 月に道民割が、8 月から Go To トラベルが始まり、資料にあるグラフとほぼ同じカーブを描いている。自身の組織は Go To トラベルも担当しており、傾向を注視しているが、7 月 22 日に Go To トラベルキャンペーン開始、8 月は登別・洞爺・定山溪といった大都市圏の近隣にある観光地が好調だった。9 月になるとそれらの観光地は若干減少に転じ、知床・阿寒といった（大都市圏から）やや遠い観光地で 8 月よりもよい数字が出る傾向が確認された。これについては、Go To トラベルの割引を利用して、少しばかり遠くまで足を延ばすようになったのではないかと考えている。もう一点、Go To トラベルキャンペーンの地域共通クーポンの割引措置が 10 月から始まったことを受け、クーポン利用可能な登録店を増やすべく観光地を中心に働きかけ、道内では現時点で 1 万強の店舗でクーポンを利用できるようになっている。10 月に入って狸小路の土産物店に聞き取りを行ったところ、4 日間で 57 万円のクーポンによる売り上げがあったということだった。クーポンを利用する観光客は今後も多数おられると思う。地域の店舗等に対し、クーポン取扱店の登録を勧めていただければありがたい。国の観光ビジョンについては、自身は情報を得ていない。

敷田：両町からの報告ならびに北海道運輸局からの情報提供に、何かご意見等はあるか。両町の観光協会はいかがか。

新村：斜里町については、河井氏からの報告及び資料の通りである。斜里町観光協会では、p.2「(3) 需要喚起策」に書かれた「アクティビティクーポンの発行」を手掛けさせていただいた。具体的には、知床観光の柱である観光船・自然ガイド・地域振興に、それぞれ 3,000 円・3,000 円・4,000 円、総額 1 万円のクーポンを 5,000 円で販売した。8 月 8 日に販売開始、9 月 20 日に 1,000 セット完売という実績となった。

若林：概要は羅臼町の石崎氏からの報告の通りである。共通クーポンについては、道の駅で多数の利用があったためか、他店舗でも登録申請の動きが加速しているようだ。

敷田：新型コロナ禍によって大きな影響が出たが、幸いにして回復基調も認められつつある。今後の観光の再開にあたっては、そもそもの観光のあり方を変えていくような動きになると思うので、意見交換や情報交換をしつつ進めていただきたい。では次の資料説明に進みたい。

（２）赤岩地区昆布ツアー部会

・資料 2-2① 2019 年度(令和元年度) 知床岬 399 番地上陸ツアー 実施報告

……知床羅臼町観光協会・若林が説明

敷田：確認だが、ツアーの名称は、前回の確認に基づきプロモーション時点で変更していた
だいたという理解でよいか。

若林：変更した。

敷田：承知した。質問・意見を承る。なければ、私から質問する。昨シーズンの参加者が 68
名、今シーズン参加者が 20 名と、参加者数の振れ幅が大きい。この原因は何だと考える
か。また、この人数では、当初計画にあった「安定した収入の確保とそれに基づく安
定したツアーの運営」は危ういと考えるが、お考えをお聞かせ願う。

若林：減った要因は、諸事情あって 2019 年度の募集締め切りを少し早めに設定したためと
考えている。収入の確保については、事業者と話し合いながら今後検討していく。

敷田：このツアーは、合意に基づき、モニタリングをしながらもう 1 シーズン実施をしてい
ただく。それ以降の実施については、来年度の今頃、9 月か 10 月に開催されるエコツ
ーリズム検討会議において協議することになる。実施者は、その協議に向けて 5 年間
の総括をお願いする。毎回いただいているシーズンごとの報告とは別に、5 年間を
通算しての自己評価と、事業を継続するのか見直すのかといったことも含めて方針を
お示しいただきたい。

若林：承知した。

敷田：スケジュール的には、来年の第 1 回目のエコツーリズム検討会議が（次期の）提案の
場になる。最終的には、その次の第 2 回エコツーリズム検討会議が最終決定となるが、
ツアーのプロモーションの時期を考慮するならば、来年度の第 1 回目のこの会議で各
位の承認を得る必要がある。その時にしっかりした資料と今後の方針を示してい
ただかねばならない。もちろん、この会議は今年度中にもう 1 回開催されるので、その時
に資料が準備できるなら前倒して検討に着手しても構わない。今説明した手順でよろ
しいか。

若林：大丈夫である。

敷田：委員・関係行政の各位はいかがか。早ければ今年度第２回目のこの会議で資料提出がなされ、検討を経て、来年度の第１回目で再延長か見直しか決定したいということだ。特に異論がないようなので、このスケジュールで進めたい。実施者は、次回以降の資料の準備をよろしく願う。以上で「（２）赤岩地区昆布ツアー部会」に係る議事を終え、次の議事「（３）国立・国定公園への誘客・ワーケーション推進事業」に進む。資料説明を願う。

（３）国立・国定公園への誘客・ワーケーション推進事業

・資料 2-3 国立・国定公園への誘客の推進事業費及び国立・国定公園、温泉地での

ワーケーションの推進事業について……環境省・松尾が説明

敷田：今まで体験してきた観光とは異なる、新たな観光がスタートしている。馴染みのない、聞きなれない単語も登場するが、マーケットがこういった観光を要求していることは事実である。特に後半にあった「ワーケーション」は、今まで消費をする場であった観光地が、生産をする場に転換するという、革命的な変化である。知床において、こういう観光とどう付き合うのかを考える必要があるだろう。いずれにしろ資源の新たな使い方が始まっており、今までの枠組みでは対応できないことも起きてくると思われる。力を合わせて、新たな観光に積極的に対応していければと思う。特に意見や質問がなければ、次の「（４）野生生物観光促進事業の進捗状況について」の説明を願う。

（４）野生生物観光促進事業

・資料 2-4 野生動物観光促進事業の進捗状況について ……環境省・高橋が説明

敷田：今の説明に対し、質問・意見等はあるか。なければ、ここで休憩とする。

<休憩>

敷田：再開する。個別部会からの報告「（１）厳冬期の知床五湖エコツアー事業」について

説明を願う。

3. 個別部会等からの報告

(1) 厳冬期の知床五湖エコツアー事業

・資料 3-1 厳冬期の知床五湖エコツアー事業実施報告 ……知床斜里町観光協会・新村が説明

敷田：厳冬期五湖ツアーに関しては、よく頑張っていると思う。一方で、諸条件あって昨シーズンは集客が十分ではなかったとの説明だった。収支決算は昨シーズン 286 万円、収入の基本は協力金を充てるとの説明だったが、その前年の収支決算は 350 万円ほどだった。収入が減れば支出も減ると思うが、何らかの「調整」をしているのか。

新村：例えば除雪については、業者と相談させていただき、少しばかり安価にしてもらおうといった努力をしている。

敷田：ということは、諸般の状況変化があっても事業として対応していけると考えてよいか。固定費が非常に大きいと、収入が急減した場合に事業の維持や継続が厳しくなると思うのだが。つまり、変動費と固定費の問題を尋ねていると考えてほしい。

新村：この事業は、ここまで育ててきたという思いもあり、今後当然ながら継続はしていきたいと考えている。先ほどの説明では、実施日数を 60 日間で設定しているが、内部では日数を短縮して、除雪費用や管理委託費用を縮小させてはどうかという話も出ている。これについては事務局から実施主体の協議会（知床五湖冬期適正利用協議会）に意見として提出し、事業は何とか継続したいと考えている。

敷田：事業内容を見直す場合、利用の頻度や期間を増やす変更でなければ承認を得る必要はなく、報告だけでよい。どなたかこれについて意見はあるか。なければ次へ進む。

・資料 3-2 知床五湖地区における取組の進捗状況について ……環境省・山田が説明

敷田：知床五湖地区の取り組みについて、質問や意見を承る。

中川：入園者が大幅減となっている中、五湖における現在の利用調整地区制度を維持できる

のか非常に心配だ。経費が入園者から徴収する認定手数料で賄われているのだとすれば、これだけ利用者が減るとどうなるのか。

敷田：今の質問は五湖の利用調整地区制度運用に係る収入の影響について、また、手数料収入への依存度についての質問だと思う。ご回答願う。

渡邊：五湖フィールドハウスの通常の維持管理、例えば清掃等にかかる費用は、認定手数料とは別に環境省が全て賄っている。立ち入り認定の手続きに係る手数料（認定手数料）は、指定認定機関である知床財団が徴収し、その収入で立ち入り認定に係る手続きをしてもらっている。中川委員のご懸念は、後者への影響に関してだと思うが、ご指摘の通り影響は出ている。今年度の認定者数は、少しずつ回復しているということだが、最終的に集計が出た段階で（大幅減であれば）、環境省としても何か検討しなくてはならないだろう。

中川：五湖の現体制は維持すべきだ。何らかの手立てを講じていただきたい。

敷田：今後の見通しについて、指定認定機関である知床財団から補足などあればお願いしたい。コロナウィルスの感染拡大防止のため、レクチャールームの定員を 25 名に押さえているとの説明だった。利用者の立場からすれば 50 名（で受講する）より 25 名の方が安心できるだろうが、指定認定機関としては収入が減ることになる。今後の見通しも含めてコメントいただきたい。

高橋（知床財団）：資料にもある通り、春先からコロナの影響をまともに受け、7 月まで利用者はほぼ戻らなかった。ヒグマ活動期が終わる 7 月末時点の集計では、認定手数料収入は前年比 26%ほどと大幅な落ち込みとなっている。7 月以降は徐々に回復、8 月から植生保護期に入り、資料にあるグラフは 8 月末までとなっているが、今現在は 3 万人ほどに回復してきていると思う。ただ、今シーズン終了まで残り 1 か月を切っており、最終的な認定者数は前年の 7 割ほどでシーズンを終わると予測している。レクチャールームの入場者数を制限することによって回転が悪くなるため、大量に利用者が来た時には、認定者数にも少なからず影響はあったと考える。中川委員にご心配いただいた認定手数料収入は、前年の 6 割程度と見込んでいる。

敷田：個人的な意見だが、今後の（コロナウィルスの）第 2 波・第 3 波もあるかもしれない。満足度のことを考えれば、（一度のレクチャールーム収容人数が）25 名でバランスが取れるのなら、（臨時的措置ではなく）少人数制の本格導入に向けた検討の余地があるのではないかと。個人的な意見（座長としてではなく）ということで、申し上げた。他

に何かあるか。

中川：五湖が最も象徴的で分かりやすいと思うのだが、地域全体にも関わることで、現状と展望を教えてください。利用者に向けた情報の提供・発信はネットを使うことが多いと思う。コロナ禍に照らし、今後ますますその重要性は増すだろう。知床五湖は年間 30 万人以上の利用者が訪れる場所だが、Wi-Fi はどうなっているか。自然センターでさえ、光回線が開通したのは昨秋だったが、そうした通信環境はある程度の安定性が求められるだろう。そうでないと、いくら情報を発信しても受け取れない。聞くとところでは、五湖フィールドハウスの Wi-Fi は非常に脆弱で、機器類は衛星回線を用いているとのことだが、それでは発信した情報が（必要とする人のところに適切に）届かないのではないか。五湖地区と羅臼側ルサ地区の通信環境の現状、今後の展望について、Wi-Fi に限らず 4G も含めてご教示願う。

高橋（知床財団）：国立公園内の斜里側は、知床自然センターまで光回線が開通し、携帯電話も問題なく通じる。しかし、その先は光回線どころか携帯電話（4G）さえ繋がらないところが多々ある。知床五湖ではスポット的に携帯電話の通信が可能となる。カムイワッカまで行くと、ほぼ全てのキャリアが通じない状態となり、情報インフラに関しては非常に脆弱な状況だ。昨今の IT 技術の進展や国の動きを見ていると、国立公園内の管理の一部は早晚ロボットや AI などに切り替わる日が来るのではないかと考えている。中川委員も言われたように、五湖では現在、衛星ブロードバンドを使っているが、速度が不安定にもかかわらず通信料が高額で、コストパフォーマンスが悪い。携帯電話会社の Wi-Fi も接続数が多くなると非常に不安定になる。我々は五湖フィールドハウスで指定認定業務を担っているが、現場の運用に際しては、通信環境の脆弱さが業務の支障になっている部分も多々ある。知床最大の観光地でありながら IT の活用とはほぼ無縁で、かなりの部分アナログで動いているのが現状である。

中川：現場の状況はよく分かった。先ほどワーケーションの話も出て、ワーケーションはもっと手前での取り組みだと思うが、通信環境の整備は非常に重要かつ急務だと思う。経費も掛かるので、国つまり環境省の方で積極的に進めるといような予定はおありか。是非とも進めていただきたいと思うが、いかがか。

渡邊：衛星回線の使用料などは環境省で負担している。今の環境の中でできること、優先できるものについては、進めている。それ以外にも無料 Wi-Fi の導入などは他の国立公園、ビジターセンター等で鋭意進めている。ただ、知床五湖まで光回線を通すとなると相当の予算額になる。地元市町村からそのような要望があるというのは認識しているので、総務省とも連携して進めていければと考えている。今後、5G の導入も出てくる

と思うが、相当な高さの鉄塔が必要だという話も聞いており、景観の保護との両立を図りつつ、前向きに検討していきたいと思っている。

中川：私も技術的な事は素人だが、例えば五湖には昔から電話線は通じていたと思う。それでも（光回線を通すとなれば）かなりな額になるのか。いずれにしろ、光回線の敷設は急務だろう。

渡邊：そういった検討は電話会社でも考えているようだが、経費が相当な額になりそうだというので、現時点では動いていないと聞いている。

長谷川：羅臼側も通信網は極めて脆弱だ。今から 15 年ほど前に携帯会社の調査依頼を受け、北海道中の電波の強弱を確認した際、この界限は自分の船が担当した。その時の担当者に、なぜ岬やその周辺で衛星回線しか使えないのか、携帯電話をもっと便利にできないのか聞いた。すると、電源の問題さえクリアできれば、知床岬でもどこでも通信環境は向上させられるということだった。実は今、相泊から先も携帯電話はかなり通じる。知床岬も、文吉湾の堰堤の先端に行けば一部の携帯電話会社で通じるところがある。沖に出れば（障害物がないので）なおさらである。ただ、最重要なのは、岬を目指すトレッカーなどが緊急時に使えるかどうかだ。この数年で岬を目指したトレッカーが 2 人亡くなっている。我々の赤岩地区昆布ツアーも高額な衛星電話を使っている。とはいえ、地元自治体が出せる予算ではない。今日は国交省の方もおいでだが、省庁はどうも縦割りで、国立公園内だから、委員会の承認を得なくてはいけないから、といった縛りばかりが多い。渡邊氏が言われたように、鉄塔など景観に配慮する必要もあるだろう。しかし、万に一つ、この動きが進むのであれば、この場における「皆で進めよう」という決断も必要ではないかと思う。

敷田：複数の方から意見・提案が示され、利用の促進ならびに管理のため、通信インフラの整備は非常に重要かつ急務だという点で一致をみている。一方で、環境省・渡邊氏の言う通り、通信に限らずインフラ整備のための予算は極めて高額になる。工事のほか、景観への影響も配慮しなくてはいけないというのも理解できる。この場としては、通信インフラの整備は前向きに関係者全員で進める、景観などへの影響や工事の影響などについては、この場で事前に十分な協議・相談をするという長谷川氏の提案通りで合意してよろしいかと思うが、いかがか。

高橋（環境省）：以前、羅臼町長から各携帯会社に対し、電波状況の改善について直接要望したと聞いている。それを受けて、環境省羅臼自然保護官事務所にも、電波が微弱な地域について強化したい、基地局を増設したいと相談を受けた。事務所としては、（鉄塔

の) 高さを抑えること、各携帯会社が連携して基地局の数を最小限にとどめることなど、十分に景観に配慮した上で前向きに進める方向で調整をお願いした。表に出る部分が少ないが、実質的に動いている部分もあるので、一応情報提供まで補足する。岬利用のトレッカーに関連して申し上げると、一部の携帯電話会社が電波状況の改善に向けて動いているが、少し(山側の入り組んだ地形に)入るとやはり接続状況は悪くならざるをえないようだ。携帯電話ではなく衛星電話に頼るところもあるようだが、岬方面に立ち入る人に対しては、携帯電話の電波状況を含む必要情報を発信していくことが、今できる対策だと思っている。基地局の増設に限定せず、それ以外の手立てについても、各位と協力しつつ検討していきたい。

敷田：エコツーリズム検討会議では、利用と管理の促進に向け、通信インフラの整備に関して前向きに検討するという方針を採用させていただいた。但し、景観や工事の影響については、きちんと検討して進めるべきでもある。環境省は、今現在お持ちの権限の範囲内では着実に進めるということのようだが、できれば関係各位が参集するこの場で、こういう判断をするつもりだということを教えていただきたい。そうすれば関係団体からの意見も聞けると思う。

高橋（環境省）：申請に関する部分は自然公園法上の審査の内容になるので、事前に公開の場での報告は難しい。もちろん、必要な報告はさせていただく。

敷田：環境省が独自に判断をしていただいても構わないが、こういう判断をする予定だということ事前に教えていただくとよいのではないかと、ということだ。権限はもちろん環境省にあるが、景観や工事の影響というのは、専門知識とは異なる次元の価値の判断・評価が関わってくる。ゆえに、事前にこういう提案があつて、このように進めるつもりだということをお話しいただければより良い方向に持っていけるのではないかと。もちろん申請に係る守秘義務というのはあると思うので、それ以外の部分で、ということだ。いかがか。

長谷川：やるのであれば、皆でやればよい。町長や副町長レベルでは、思うように進まない。この会議の場で相談していく方がよい。

敷田：前向きなご意見に御礼申し上げます。環境省からは明確な回答が得られていないが、ぜひ検討を願う。関連して他に意見等はあるか。

桜井：ウトロ地域協議会の事務局から申し上げます。先ほどの携帯電話の話で、(設置の申請の際に)環境省からアンテナを共有してもらえよう申し入れているということだっ

た。アンテナについては、国立公園の内外に関わらず、景観を大切にしている知床においては、かねてから不合理性を感じていた。携帯電話料金を安くするという動きがある一方で、この周辺では、都市部と違って携帯電話会社によって通じやすさの状況が異なる。電波状況の改善と、アンテナの乱立が景観を損なうということとのジレンマはあるわけだが、アンテナを共有することで携帯電話会社ごとの通信状況が改善された事例はあるか。

高橋（環境省）：個別に調整して、複数社でアンテナを 1 本に集約してもらった例はある。しかし、全国一律にそうしてもらえるのかと問われれば、恐縮だがそこまでの事例は承知してないので、お答えしかねる。景観に配慮するという観点では、個別に交渉して話を詰めていく形になるだろう。

桜井：共有することで、通信環境の改善や通信速度の上昇につながっていくことが期待される。先ほども話題に出た管理や運営にあたっての Wi-Fi の必要性という部分だが、知床五湖の植生保護期、ガイドなしで歩ける期間に、例えばもしヒグマが遊歩道上にいた場合、個々の利用者、散策中の個人携帯に、何らかのアプリをインストールしてヒグマの位置情報などが提供できたらとてもよいのではないかという声が多く寄せられていると聞いた。管理だけでなく、利用者の安全のためにも、そうしたアプリ導入に向け Wi-Fi の良好な環境を望む声は多いと聞く。ぜひ通信網の整備が必要だということを、ウトロ地域協議会の意見として申し上げる。

敷田：利用者の利便性向上と安全確保の面からも通信環境の改善は必要だというご意見だ。エコツーリズム検討会議としても、管理・利用促進・安全性向上を総合的に考えて、通信環境の整備は最優先事項であるということは合意できる内容だ。一方で、その整備に関しては景観上の問題にも配慮する必要がある、情報共有と意見・皆の知恵の反映をしながら、総合的に判断が出来ればよいと思うが、長谷川氏、いかがか。

長谷川：それでよい。

敷田：では、環境省も今の意見等を反映し、情報は提供いただくこと、相談をしつつ進めることでお願いしたい。無理を言うつもりはないが、大勢の知恵というのは一人の専門家の知恵に勝つこともある。ぜひ前向きに対応いただきたい。議論をまとめる。通信環境の改善はこの場の合意事項として促進する、景観や工事の影響については、出来る限りこの場で各位の意見を聴取した上で相談しながら進めていく。では次の議題に移る。

(3) カムイワッカ地区における取組

- ・資料 3-3 カムイワッカ地区における取組の進捗状況について
- ・資料 3-3 別紙①2020 年度 自動車利用適正化対策事業の結果について
- ・資料 3-3 別紙②知床国立公園におけるマイカー交通規制に関わるモニタリング調査の進捗について
……斜里町・南出が説明

吉澤：オホーツク総合振興局知床分室の吉澤から、カムイワッカ湯の滝の一の滝より奥の利用について補足する。斜里町・南出氏からの説明にあった通り、9月10日に現地調査を行った。現在、その結果の取りまとめ中で、今この場で皆様に報告できるところまで整っていない。12月に開催予定の今年度第2回カムイワッカ部会の開催前には、一度持ち寄って議論する場を設けたい。その上で、12月のカムイワッカ部会で提案させていただく。

敷田：愛甲委員から今回の取り組みの意味などを分かりやすく補足していただけるか。

愛甲：今後の議論のために、今回の取り組みの成果をどう評価するかということで、調査に協力した。モニタリング調査は、この Shiretoko Autumn Bus Days の3日間だけではなく、通常のマイカー規制でのシャトルバス運行期間と、秋の一定の利用者数が予想される、いわゆるシルバーウィークにも実施した。シルバーウィークには、例年かなりの渋滞が発生するが、今期も五湖の駐車場で約2kmの入場待ちが発生したという報告があった。カムイワッカの駐車場でも9月21日に約500mの渋滞が発生した。それらの期間を比較することで、この新しい取り組みが地域の観光に携わる方たちに受け入れられたか否かなどを比較して報告すべく、今現在分析を進めているところである。

敷田：今回の取り組みは、単にシャトルバスに乗り換えてもらうということではなく、新たな魅力を提供しつつ移動の選択肢を提示したこと、移動全体のマネジメント、これをモビリティ・マネジメントと言うが、そこへ踏み込んだという非常に先進的な試みである。是非ご注目いただきたい。本件に関して質問や意見を承る。

笠井：斜里山岳会から、次回カムイワッカ部会に関連すると思われる話題を提供させていただく。最近になって、かつて硫黄の採掘と搬出のために使った古い作業道を利用したツアーを実施し始めた方がいる。当該人物は知床ガイド協議会の会員ではないため、あまり知られてないと思うのだが、ツアーの実施区間が硫黄山の新噴火口からその下にある道道を挟んで海岸にある建物の方までを行動範囲としている。非常に魅力的な場所

であり、カムイワッカ地区の（利用の）多様性にも貢献する良質なツアーだと思って注目しているのだが、一方で懸念もある。道路の特例使用の期間や区間について、当該人物が曖昧な解釈をしている可能性があること、道道から下の自然保護区の設定状況などを理解していない可能性があること、遊歩道として整備されている場所ではないので遭難の恐れがあることなどである。以上、情報提供まで申し上げた。

敷田：ご懸念の点、規制及び管理上の問題の有無について環境省から補足願う。

渡邊：環境省では当該人物及びツアーの存在は承知している。ウトロの観光関係者、行政機関も承知していると思う。文化的な価値があるものについて、斜里町として今後の活用の検討を進めるということで、公園計画の区域を今言われた場所を含む形に変更するなど、環境省としても連携する方向で動いている。その人物に対しても、規制の状況について逐次情報共有している。あの場所は、今後利用を促進しようとした場合、駐車スペースが限られていることなど、今後の活動の展開次第では、色々な調整が必要になると認識している。

敷田：今、斜里山岳会から情報提供があったような利用を継続しても、管理上は特に問題がないということだ。

渡邊：単に立ち入るだけであれば国立公園の法律上は問題ない。例えば林野庁の規制に係るもの、（国有林への）立ち入りに必要な手続き、もしくは今後何か建てたい、整備したいということであれば調整は当然必要になる。現状の当該人物の活動は、手続きを経ている。例えば、試行的な硫黄の採掘といったものは継続して行っている状況だ。

敷田：現状では軽微な利用だと思われ、大きな影響はないと判断していると理解したが、今後、新たな利用に発展する可能性がある。提案をしていただくまでの必要はないにしろ、次回の検討会議までに当該人物から詳細を聞きとってこの場で報告をしていただくことは可能か。

渡邊：既にカムイワッカ部会の関係者間では共有しているが、カムイワッカ地区全体の利用とも関わってくると思うので、まずは情報を整理する。

南出：今現在、その方とは意見交換を行っている。次回会議で報告する。

敷田：本来は主催者本人から聞き取りたいところだ。それも視野に進めていただきたい。別に規制をしたり止めろと言ったりするわけではなく、単純に実態を知りたいというだ

けなので、カムイワッカ部会の中での共有のほか、全体（エコツーリズム検討会議）としての共有も願う。

南出：了解した。

中川：10月のShiretoko Autumn Bus daysについて質問する。車両の通行管理のための新しい試みという位置づけだと思うが、もう一点、ヒグマの人との危険な状態・好ましくない状況を回避するための方策としても期待されていたと思う。3日間だけとはいえヒグマを見るための渋滞や、撮影のために（ヒグマに）接近するカメラマン、長時間待機するカメラマンなどに関する成果はあったか。今後活用可能な知見や、期待できることなどあったか。

渡邊：当然ながら、マイカーが入れない状況なので、今まで最も問題が顕在化していた岩尾別川周辺にカメラマンはおらず、岩尾別川の孵化場についても、これまで手前でロープを張って立ち入りできないようにしていたが、Bus days実施期間中はロープを張らずに済んだと聞いている。一方で、カメラマンが幌別川など別の河川に分散する傾向が確認された。

中川：初の試みで3日間だけだと、ヒグマ対策という点での明確な成果は確認できなかったのかもしれないが、次年度以降も継続するのか。

南出：来年度以降については、現時点で未定である。まず、今回の事業内容について総括を行い、愛甲委員に依頼しているアンケート結果やそれに基づく評価を踏まえて、地域の方々と改めて協議する。その上で、次年度以降どうするかカムイワッカ部会で決定していく。

敷田：斜里町としては、この事業の目的をどうお考えか。

南出：移動と体験を組み合わせた新たな誘客イベントと位置付けて実施した。また、並行してクマ渋滞の問題も解決していければよいと考えた。

中川：バスからヒグマを見ることができたと聞いて、そういう安全な形でヒグマを見せること、ひいてはヒグマ対策にも貢献するということなのだと理解していたのだが、そうではないのか。

渡邊：当然ながらそれも目的に含まれる。それもあって環境省の補助金に町から応募しても

らった。また、科学委やエゾシカ・ヒグマ WG でも当該事業について紹介した。それは、中川委員ご指摘の目的も含まれているからだ。

敷田：手段が目的になっているように感じられる。どういう目的のために、こういう手段をとったという説明に、次回から切り替えていただくようお願いする。取り組み自体を否定するものではない。何のためにやっているかということは常に重要で、手段はそのあとについてくるものだ。

秋葉：知床財団から補足する。野生動物対策や軋轢対策は、当然ながら目的のひとつであり、我々がやりたいことでもある。しかし、従来の、混雑解消などの単一目的でのマイカー規制が継続不可能だというのが私たちの共通した認識で、事業は保全を目的としているが、観光振興や魅力向上の観点がセットにならなければ、実施の合意や継続は困難であると感じている。観光振興や誘客を入口とし、出口に環境保全や軋轢対策を位置付けている、ということが先ほど南出氏の説明の趣旨だと理解している。軋轢対策や渋滞対策を解決するために行動を規制したり、レクリエーション利用を制限したりするのではなく、来訪者に新しい価値や楽しさを提供するようなものに仕立てていかないことには、この手の取り組みは全く進んでいかない。それが約 20 年間にわたるマイカー規制の実施で得られた一つの結論であり総括だ。入り口、つまり見せ方としては観光を優先し魅力をアップさせることが大前提になるのだが、その結果として軋轢対策が進む、良質で適正な利用が進むというのが、本事業の目指すところである。利用を規制しても改善されなかったというのが今までの反省であるから、今回は考え方を 180 度変えて入り口に魅力アップを持ってきて出口に「結果的に軋轢対策が進む」という仕組みを作った。ゴールまでの道のりはまだまだ遠いが、この 3 日間は今まで追い払う存在だったヒグマがバスの中から観察できるようになり、追い払いをしていたスタッフが、ヒグマ情報をガイドや利用者に提供する役割に変化した。従来の考え方や役割を根本的に転換した取り組みの第 1 歩と考えている。これがさらに前進するか否かは、利用者に支持されるか否かにかかっている。地域の価値を高めるようなものにできれば続いていくだろうし、またそういうものでないと続かないだろうというのも実感である。いずれにしろ、南出氏が言いたかった目的と手段の関係は、今申し上げたようなことである。

敷田：分かりやすい説明である。今回のカムイワッカの取り組みというのは、知床のカムイワッカ地区の価値を観光客に享受してもらうことと、ヒグマとの軋轢の回避、環境保全を実現するために、観光客にとってのより充実したサービスの提供とモビリティ・マネジメントを同時に導入したという説明だ。最終的に全体がプラスになる、従来の、規制によってコントロールするという方法とは逆のアプローチになるが、最終的に皆がメ

リットを享受できるのであれば問題ないと考える。これまでの目的は（混雑緩和等のための）車両規制だったものが、今回からは観光客の体験充実、ヒグマとの軌轢回避と環境保全、これらの目的に対してモビリティ・マネジメントと価値の創出を同時に行うと理解できる。他にご意見等はあるか。

間野：今回のカムイワッカ部会の取り組みは、カムイワッカへのアクセスの問題だけではなく、知床という世界自然遺産地域の人の動線をどう作るか、利用者と管理者の双方にとっていかに快適なものにできるかということに尽きよう。利用者にとっては、満足度が高い、効率よく、安全かつ楽しく回れる。管理者にとっても、低コストで、余計な心配をせずにすみ、何かあった時は効率的に対応できる。そういうものを目指しているということだろう。秋葉氏は、道のりはまだ遠いと言われたが、今回の試みの意味に気づく人が増えることが期待される。カムイワッカに到達する途上には、幌別・岩尾別、そして知床五湖など、魅力的な場所が多くある。観光の拠点をつなぐ線、利用者の動線をどのように管理するのがお互いにとって最良か考えてもらえる、そんな見せ方を工夫していただきたい。自身も札幌にいて、バスの乗客が車窓からヒグマを見ている、ガイドが解説する、乗客は非常に喜び、興奮し、感動している、そういうシーンをニュース番組で拝見した。短期間ではあったが、実際に利用した方にとっては大きなインパクトがあったのではないか。突破口と位置付けて、今後これを全体の管理や世界遺産知床の利用の向上に向けてどうつなげていくか、そういったことも含め、広い視野で考えていくことが重要だと思う。

敷田：新しい体験の価値の創出とモビリティ・マネジメントを並行して実施する、それを通じて皆が満足する方法を最終的に見つけていくという、転換点となる事業だと思う。座長としては、この会議の場でその目指すところなどを今後も共有していただきたいと思う。

桜井：今回このバス運行計画が最初に示された時、我々としては非常に戸惑いを覚えた。その理由の一つに、「ウトロ地域協議会はシャトルバス化に反対なのか」という地域の人たちからの問いかけがある。我々は反対こそしていないが、先ほど秋葉氏からあったような説明がなされぬままだったため、行政に対し不安感というか嫌悪感を抱いたのは事実である。これまで、人の前に姿を見せるヒグマには、追い払いで対応してきたのに、今回は見せるという。それも（説明が後回しになったために）理解が追い付かなかった。また、先ほど中川委員がおっしゃったようにこれはカムイワッカ部会で協議・実施することなのかという点もよく分からなかった。（ヒグマを）観光的な資源と位置付ければ、納得できる部分もあるし、エコツーリズムとしては先進的で知床でしかできない社会実験だということも分かる。ただ、ここで生活する者にとっては実施の決定前にもう少し

丁寧な説明が欲しかった。先ほど「支持されないと継続は困難」という話も出たが、継続に向けて、我々と共有しながら進めていただきたい。

敷田：こうした意見が出てくる背景には、この事業の目的や将来的な位置付けがまだ曖昧であるということがあろう。対応として、次回のエコツーリズム検討会議では今一度目的をクリアにさせていただき、きちんと報告し、今後どういう展開をしていくのかお示しいただいた上で議論に付したい。通常であれば、カムイワッカ部会の枠組み内で解決していただいてよいのだが、今回の事業の重みや将来的な展開の可能性を考えると、カムイワッカ部会での協議・決定の前に、一度こちらのエコツーリズム検討会議で話をして議論したほうがよいというのが、座長である私からの提案だ。これは、内容に問題があるから検討しなোসということではない。むしろ内容としては高く評価でき、今後の知床の観光とエコツーリズム、利用のコントロールに対し、大きな影響を持つことになるだろうから、この場でも相談をしておいた方がよいという提案である。

渡邊：先ほどの南出氏及び秋葉氏からの報告にあった通り、本件はコロナの関係で急遽動き出した。環境省の補助金を充当できそうだとということで、公募という手順を踏まねばならないとなった時点で5月、かなりギリギリの段階で申請が始まり、2〜3週間という短期間の間に判断して申請を出さねばならなかった。そういった諸事情があり、地域の各方面への説明と申請の両方を急務として同時並行で進めた。その間、まず関係者を優先して飛び回っていたという状況で、確かに地域の合意形成が後手に回った点は否めない。カムイワッカ部会は、自治会・警察・道路管理者・地域関係者などがほぼ網羅されているので、まずはそこで協議させていただくが、今後は今回の検証結果を踏まえた丁寧な説明を意識して進めたい。次年度のマイカー規制をどうするかはこれから決めていくが、このエコツーリズム検討会議で提案して了承となるとスケジュール的に厳しい。まずは部会の方で議論したい。

敷田：スケジュールのことは承知している。また、過去の経緯を非難するつもりもない。今後の進め方として、カムイワッカ部会で検討することでよいが、全体にも共有しつつ進めてほしいこと、事業の目的を分かりやすく整理をしていただきたいこと、いずれも次回会議での検討に向けた座長からの要望であり、方向性が間違っているという意見は出ていないと認識している。

別件で私から確認だが、資料3-3の「4.」にあるカムイワッカの一の滝より奥の利用について、いささか唐突感がある。経緯等をご説明いただけるか。

新村：カムイワッカの一の滝で奥の利用については、規制開始から10年以上が経過する。観光関係者の間では、四の滝までは非常に知床らしい秘境感あふれる最後の場所と言

われており、かつて訪れた利用者が再び来てみたら、一の滝までしか行けなくなっており非常に残念だといった声も少なくない。また、昨今のアドベンチャーツーリズムといった方向にも目を向けるべきではないかとの意見もあり、要望を出させていただいた。落石や土砂流出の危険等々あるので、再調査を経て、利用のルールなどについても今後の検討ではあるが、経緯としてはそういったところである。

敷田：価値ある資源の利用再開を視野に入れた検討はよいことだと思う。地元観光関係者の希望に基づいた新たな利用という意味では、本来ならば提案をしていただくのがルールではある。ただ、カムイワッカ部会が既にあり、7月から検討を開始しているようなので、引き続きカムイワッカ部会の枠組で検討していただくことでよい。検討結果については、次回のこのエコツーリズム検討会議に報告いただきたい。軽微な利用の改定であればその場で承認をしてもよいと思う。

新村：（エコツーリズム戦略に基づく）提案ではなく、検討結果の報告という理解でよろしいか。

敷田：資料には（利用ルールなどを）検討して「カムイワッカ部会に提案」するとなっている。同じことを（エコツーリズム検討会議に対して）していただければよい。問題がなければその場で承認されると思う。

新村：カムイワッカ部会とは別に部会を作ることか。

敷田：そうではない。既にカムイワッカ部会があるので、そちらで検討していただき、次のエコツーリズム検討会議で検討内容の報告をしていただければよいということだ。

新村：承知した。12月のカムイワッカ部会での協議・検討内容を、こちらのエコツーリズム検討会議の場で報告・共有させていただく。

敷田：では、既存のカムイワッカ部会に協議・検討を信託する。その上で、内容が妥当であれば（このエコツーリズム検討会議としても）承認することとする。もちろん、妥当でない場合は再検討をしていただく。
では次の資料説明を願う。

・資料 3-4 ウトロ海域における保全と利用の取り組みの進捗状況について

……知床ウトロ海域環境保全協議会・福田が説明

敷田：安定した事業展開だと思う。知床小型観光船協議会から何か補足はあるか。

神尾：特にない。報告の通りで、小型観光船は6月6日まで運行できなかった。来年度、頑張りたい。

敷田：ハンドブックは既に増刷したのか。

福田：これから改訂作業に入る。

敷田：売り上げているのは年間4,000部ほどか。

神尾：年々販売部数が低減している。

敷田：各位もぜひとも支援を願う。以上で個別部会全体を通しての報告を終了する。時間が押しているので議事進行ご協力を願う。

（４）その他

・資料 4-1 知床世界自然遺産地域長期モニタリング計画について

敷田：説明の通り、各位へは今後の調査についても協力いただきたい。

・資料 4-2 令和元年度 知床国立公園利用のあり方に関する行政間会議 議事概要

・資料 4-2 別紙① 知床半島の利用に係る将来のゾーニングイメージ(案)について

……以上を環境省・高橋が説明

・資料 4-1 別紙② 2017～2018 年度開催「知床国立公園利用のあり方に関する懇談会」資料

……斜里町・南出および羅臼町・大沼が説明

敷田：説明に関してコメント・意見等を承る。

中川：資料 4-2 別紙②に示された斜里町の「④ホロベツ・五湖・カムイワッカ」について、大部分が B 地区で海岸段丘上やその縁部から海も見える魅力的なエリアだ。一部に A

地区も含み、基本的に遊歩道などはない。つまり利用を想定していないバックカントリーもしくはバックカントリーに接するエリアである。しかし、色々なところに掲載された写真などを見ていると、意外にガイドツアーなどで人が入っている。資料には、その辺のデータは含まれていないようだが、資料 4-2 別紙②は利用実態を把握した上での提案なのか。

敷田：事務局に確認だが、個別具体の議論を始めると優に 1 時間超過するが、よろしいか。

高橋（環境省）：次の、北海道からのアドベンチャーツーリズムに関する報告もぜひ皆様にお聞きいただきたい。今日のところは大枠の協議でとどめておくのではいかがか。

敷田：そのためには、今のゾーニングに係る提案は、大枠の方向性についての議論に限らせていただき、具体的な議論は後の ML 及び次回会議で検討することとしてよいか。関係行政の方の中にも同じ便をご利用の方もいると思うので、より有効に時間を使いたい。ということで、中川委員、個別のデータについては次回以降に先送りとさせていたたく。了承願いたい。

中川：承知した。

敷田：ほかに何かあるか。

石川：これは国立公園の利用の検討としてのゾーニング案だという理解でよいのか。我々は世界自然遺産の枠組みにおいて議論をしていると認識しており、お示しいただいた案が遺産地域の管理と最終的にどのような形で調和するのかがよくわからない。これまでも、先端部地域、特に知床岬地区については様々な議論があったと思うが、このゾーニング案では原生地域の旅、冒険の旅と記載されており、どうつながっていくのか見通しがつかない。

敷田：ご指摘の通りで、手段と目的が明確ではない。国立公園管理と遺産地域の管理の枠組み内での（このゾーニング案の）位置づけについて、ご説明願う。

高橋（環境省）：このゾーニング案ができた背景には、こんな利用をしたいという要望が地域から上がってきており、例えば「利用の心得」などの自主ルールを含め、やりたい事と実際の規制との整合を点検し、見直す時期に来たのではないかということで、今回の具体的な動きになった。国立公園管理の管理との兼ね合いという点については、資料をご覧いただければお分かりの通り、このゾーニング案は国立公園外も含めたものになっ

ている。先ほど両町から報告いただいたように、まずは地域としてこのようにしていきたいという要望をまとめたものであり、国立公園と銘打ってはいるものの、内容的には国立公園外まで含めた提案になっている。遺産地域の管理との兼ね合いについては、まさにおっしゃる通りで、もともと A 地区と B 地区とで管理や規制の度合いが分かれている。そういった管理の視点についてコメントをいただき、この要望に対してはこういったところに配慮が必要だとか、逆に、ここはこれで差し支えなかろうといったご助言が頂戴できればと考えている。個別具体的にどういう内容になるかという点は、先ほど羅臼町からも言及があった通り、地元との協議を経つつ詳細を詰めていくことになる。今回は大枠の議論にとどめ、詳細は今後進めていくような流れになると認識している。

石川：そういうことであるならば、我々委員は世界自然遺産地域知床について論じてはいるが世界遺産の科学委員会の見解を代表してこの場にいるわけではないので、この場で決定するというのではなく、科学委員会とのやり取りも経て決めていくということになる。

敷田：ご意見の通りだと思う。この場で決定することではない、このゾーニング自体の可否を問っているわけではないということを、まず確認しておく。今後、仮にこの内容で進めていく場合には、何をどのように決定していくのか、その道筋を提示していただくのがルールである。「知床国立公園利用のあり方に関する行政間会議」からご提案いただき、この場で議論をすることになる。

高橋（環境省）：どのようなことが新しい利用になるかについては、資料 4-2(別紙②)の「①先端部地区全域」の中に片道渡船や野営地の整備などあるが、それらを本当にやっていくか否か、今後詳細を詰めて要望が固まってからの話になると思っている。実際に提案をするのか、その際の主体がどこになるかといった点は、まだ詰め切れていない。今は、こういった話が地元から出ているということをご報告させていただいた。

敷田：説明はもっともなのだが、石川委員のご意見のとおり、詳細を検討する前に全体の大枠、これをどう使っていくのか、どういう手順で決めていくのかという合意が必要だ。順番としては手順説明が先なので、次回の会議でそれを示していただき、その後に個別具体の検討に入る。個別の内容についてここでの議論だけでは難しいだろう。それぞれで進めていただくことも多かろうが、それを共有する必要がある。また、これは座長として申し上げるが、既存のゾーニングや規制の決め事がある。利用適正化の基本構想については、当然ながら精査・検討していただいていると思うが、その整理をするチャンスでもあろう。活用されていないエコツーリズム推進計画などもあるので、そうしたものの整理も合わせて実施していただきたい。さらに、ゾーニングが基本的なツールとな

っているが、遺産の管理計画にはゾーニングを採用するということが出てこない。エコツーリズム戦略もそれを想定していない。したがって、（採用するとすれば）世界遺産管理計画の改訂が必要になるだろう。部分改訂でよいと思うが、少なくとも科学委員会に諮る必要があると考える。エコツーリズム戦略については内部で相談して前に進められるが、こういった新たな管理ツールの導入は、規制にも利用の促進にもなりえるため、知床の将来を賭けた検討になる。慎重に進めていただきたい。やめろと言っているのではなく、手順を踏んだ方がよいということだ。ある意味では、管理計画を実行力のあるものにするチャンスでもあるので、ぜひ進めていただきたいが、手順を踏んで慎重にお願いしたい。関連してご意見などあるか。

愛甲：そもそも本件は、先端部地区の利用の心得の改訂から派生したと理解している。その後、地域における協議を行い、その成果を受けて行政機関で何ができるかを検討したという流れだろう。そう考えると、石川委員ご指摘のように、これをどう使うのか、どう位置づけるのかということこそが重要だ。今後、知床の遺産地域の管理計画や国立公園としての管理計画の改定の際には、これを部分的に反映させることもあるだろう。そう考えると、今はこれをどう扱うのが中途半端な状態になっていると思われる。せっかく色々よい意見が出て協議もされているのだが、この場での共有もうまくできてない状態なので非常にもったいないと感じる。どこの会議で検討の成果を取りまとめるのか、関係行政機関で今一度きちんと整理した方がよい。

敷田：資料にある情報量は、与えられた時間内には解決ができない。非常に重要な提案で内容も充実しているので、次回の会議までにオンラインなど様々なツールを駆使して議論をするか、あるいは臨時のWGを開催するかして、まず進め方について決めた上で、細部の議論をした方がよい。せっかくの重要なアイディアなので最終的には合意のもとで位置づけられるのが望ましいあり方で、拙速は避けるべきだ。まず、今後の進め方を提示していただき、それに合意を得た上で次に進むのが妥当な進め方だと考えるがいかがか。

高橋（環境省）：このゾーニングのイメージ案をどこに位置付けるかという話は、懇談会の中でも出た。例えば公園管理計画に位置づけたらどうかという案も挙がったが、公園のゾーニングは既にあって、使われてもいる。国立公園の利用については環境省としてどう関わるかは、午前のWGでも報告した通り、自然公園法の改正の中で利用についてどう入れ込まれるかにも関わってくる。公園管理計画・遺産管理計画のどこに結び付けていくかは、法改正の全体の流れも見据えながら考えていくことになる。今回の地域からいただいているイメージ案の要望と現行ルールのどこに差異があるか、改めて整理しているという話もしたが、どこをどう変えたいのかによって位置づけ方も変わって

くるのではないかと考えているので、具体的な改変箇所や位置付け方については、少々時間をいただきたい。

敷田：石川・愛甲両委員のご意見は、進め方自体をもう少しオープンにして、手順について最初に合意してから行った方がよいのではないかとということだ。重要な内容なので、拙速は避けるべきだということであり、内容の問題ではない。

渡邊：進め方については、以前からこの「知床国立公園のあり方に関する懇談会 これまでの経過と今後の予定」ということで既に提示している。本日の資料に含めておらず恐縮だが、平成 30（2018）年度の第 2 回会議の際に、「資料 3-1 これまでの経過と今後の予定」として、2021 年度までの予定を示し、それに基づいて進めさせていただいている。今年度何をするかになっているかということ、こういった地域の意見を踏まえて、委員の皆様から「進めてよい」ということであれば、では実際に「利用の心得」や遺産管理計画と齟齬がないかどうか確認し、齟齬があるのであればそういった内容を改変する必要の有無について検討していくと、今はそういう段階にあると理解している。ここに出てきた案は、先ほど中川委員からご指摘があったように A 地区を含んでいるなど、現行と合致しない部分がある。本当にこれでよいのかご確認いただき、これでよいのであれば今後そういった遺産管理計画やエコツーリズム戦略、利用の心得など様々なものに反映させていく段階に移行するのだと考えていた。

中川：ある場所でどういう管理をするか議論をする際に、最も重要なのはそこがどういう場所であるかという点だろう。ゾーニングは、最初は自然の状況や植生など、次には利用の現状など、様々な要素を勘案して決めていくものだと思う。これだけの面積があつて様々な環境・植生・利用状況の違いがあるので、出来るだけ多くの方と情報共有すべきだ。この会議は参集人数が最多の会議だと思うが、この場所ではこういう規制をするということ判断する材料として、できるだけ多くの方の意見を聞き、また、利用形態は時代とともに変容するので、現状だけでなく未来を見据えて判断することが求められるだろう。

田邊：進め方については、敷田座長の言の通り、次回のこの会議である程度の整理をしたものをお示ししたい。ゾーニング自体、非常に幅が広く、様々な事柄に関わってくる。それを一つずつ個別に整理するためのステップが必要だと思う。今後の進め方について今言えるのはここまでである。

敷田：これまでも話してきたからこうしてくれではなく、関係各位が十分な議論を尽くせるか、いかに気持ちよく合意できるかが重要だ。ゾーニングは、利用の促進と規制の両面

を併せ持ち、重要なコントロールの導入につながる。後々まで影響が及ぶので、正確な位置づけとその共有がカギとなる。ゆえに、大枠の進め方をまず示していただき、議論の積み上げを順次組み込んでいくのが最良の方法だ。

田邊：大枠を決めなければいけないというのはその通りだ。大枠の全てを示すことはできないかもしれないが、その整理から始めるという方針でいく。

敷田：私が大枠と言っているのは、今後世界遺産地域を含むこの地域のマネジメントにゾーニングという手段を採用していくことを合意するのが第一ステップ、国立公園や世界自然遺産地域の管理計画において、我々がゾーニングに依拠することを合意するのが第二ステップである。様々なコントロールにゾーニングが影響することになるので、利害関係者にとってハッピーなやり方を採用すべきということだ。やるべきことはそう大きく変わらないと思う。ステップを踏むこと、皆が気持ちよく合意する手法で進めることの二点だ。

田邊：同じ考えである。

敷田：今回は結論のようなものが出せなかったが、次回以降、今ご提案をいただいた内容について関係する各位から提案をしていただき、議論をするということで進めさせていただきたい。

中川：蛇足かもしれないが、ご存知の通りゾーニングには国立公園・鳥獣保護区・森林生態系保護地域と複数あり、それぞれが被っており、それぞれが整合性を保ちつつ、かつ法律に基づいて設定されている。そこに今こういう形で利用の促進と保護を考慮して（新たなゾーニング案を導入する）、となると、大変な作業になるだろう。現状を把握し、未来を見据えた上で進めていただきたい。

敷田：本件については改めて位置付けをお示しいただいた上で進めることとする。次の議題に進む。資料の説明を願う。

・資料 4-3 アドベンチャーツーリズムの推進と世界自然遺産を活用したプロモーションの

進捗状況について ……北海道・石塚が説明

敷田：今の説明に関連して質問やコメントがあれば承る。

長谷川：説明にあったアドベンチャーツーリズムのガイドに限らず、道庁で推進しているアウトドアガイドの認定事業自体が、実態とずれている。道内にアウトドアガイドが一体何人いるとおいてか。振興局の会議では何回も言っていることだが、北海道は海に囲まれているのに、海のガイドがいないことをどう考えているのか。私の活動拠点である羅臼には、世界中からオオワシやシャチを見に人がやってくる。ナキウサギのことを勉強する必要などない。いざ海難事故になったら、我々ほど救難技術に長けた者もないだろう。そういうことを全く考慮せず、補助金事業で北海道のアウトドア認定を受けていない者は使わないという。これに対しては、我々はすぐに意見して覆した。北海道にはガイドはごまんという。道の資格など持っていない人ばかりだ。アドベンチャーツーリズムの資格を有して英語が喋れる、それはそれで結構だが、この資格をもっていなくてもスペシャリストと呼べる人は羅臼にも斜里にも多数いる。道庁でいろいろ考えているのだろうが、一番の愚策だ。この数年、海の観光利用は補助金も何もない中で急激に伸びてきた。瀬戸内の定期航路事業者には 2 分の 1 補助がでるそうだが、我々不定期航路には何も出ない。国交省にも物申したいが、北海道のこの事業、これはこれで切羽詰まってる策だろうからよいとして、今言ったような課題はきちんと持ち帰っていただきたい。これはこの場の総意なのではないか。環境省も同じ役所だから遠慮して言えないかもしれないが、同じように感じているのではないか。山岳会もそうだろう。

敷田：北海道庁から何か反論はあるか。

石塚：ご指摘は課題として認識している。海という視点が入っていないという点については、制度発足当初から認識している。今回アドベンチャー・トラベルのガイド認定を付け加えるというのは、今のこの機運に乗って必要な措置だと考えて進めているが、当然ながらその根幹であるアウトドアガイド制度についても、改善に向けて検討していく。いただいた意見は持ち帰り、改めて検討の材料とさせていただきます。

敷田：羅臼のガイドは日本一であるという長谷川氏の説明に、各位納得されたことと思う。ちなみにこの北海道のアウトドアガイド資格は、私が札幌にいる頃に委員長として検討した制度であるので、責められるべきは道庁ではなく私だろう。このアドベンチャー・トラベルのガイド資格は非常にレベルが高い。中でも、他者に説明する能力が重要な要素である。市場規模が非常に大きいことでもあり、今の状況に注目しておくとともに、今後の展開を共に考えていければと思う。北海道運輸局から何か補足があればお願いしたい。

水口：道庁が紹介したのは北海道のアウトドアガイドというジャンルの資格である。我々

が今取り組んでいるアドベンチャー・トラベルのガイドは、守備範囲が極めて広い。アウトドアガイド資格を持つ人だけがガイドではないし、全く異なる種目の人もいる。そういう方々すべてがアドベンチャー・トラベルのガイドになりえる要素をお持ちだご理解いただきたい。何が違うかというと、知床の自然は少々特別だが、自然とアクティビティだけなら世界中どこにでもあるが、そこに歴史や文化など、その土地がどんな苦難を乗り越えてきたか、どうやって今のような状態になっているかといったストーリーを乗せて、その土地を唯一のものとして旅行をデザインする、そういった作業が求められる。長いと 10 日間くらいになる。あるジャンルのガイドのほか、全体をコントロールするガイドなど、色々な技能・守備範囲を持つ方々が求められている。そういった方々に力をつけていただくべく、我々もガイドの育成ということを念頭に置きながらやっている。ありがちなのは、実際にあった話だが、ある地域で（お客を）寺に連れていき、和尚の話をとくとくと聞かせ、その後でバギーに乗せて連れまわすという、お客にしてみれば、いったい何をさせたいのか、という商品だ。そうではなくて、その土地の歴史や文化をきちんと説明した上で、それを体験・体感していただく、そんな旅行をデザインしていく。その過程でガイドはとても重要な役割を担う。道庁がお持ちの種目だけでは不足というのは長谷川氏の指摘の通りだと思う。ともあれ、そういう旅行を目指し、地域に利益が還元されるような旅行をデザインしようとしている。やっていること、目指していることは、本日ここで協議した内容と全く同じ内容だと考えているので、是非色々な面で協力しながら進めていきたい。

敷田：長谷川氏の指摘も水口氏の説明も、同じ方向を向いているように思われる。重要なのは、今後アドベンチャーツーリズムという世界市場に知床が向き合うこと、世界中の観光地と競合する覚悟がいるということだ。それは単に売り込めばよいということではなく、知床の魅力や内容をきちんと言語化して説明する能力にかかっている。言語の問題ではなく、制度や仕組みが整った受け入れができる観光地であるか否かだ。したがって、この場ではそういう世界標準を意識して議論をしていただきたい。

会議時間を 1 時間ほど超過して 17 時になった。事務局に何うが、残る資料は持ち帰りでよい。具体的には参考資料 4 と 5 である。ご了解いただいたので、この 2 つの資料についてはこの場での説明は省略する。各自で読んでおいてほしい。次回会議で時間があれば、説明する。どちらも重要な制度の変更に関するものである。

では、本日の議事をまとめる。

本日の検討はエコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況をお聞きした上で実施部会からの報告をいただいた。また、両町から新型コロナウイルス感染拡大を受けた知床観光の現状について、今後の回復見込みと今後の方針も含めて説明をいただいた。大変充実した内容で安心できる内容であった。

赤岩地区の昆布ツアー部会については、次回の会議で過去 5 年間の総括を行い、今後

の展開に係る検討を行う。資料準備を願う。

個別部会からの報告では、まず厳冬期の知床五湖ツアーについて、安定してゲート管理ができるのでこのまま進行するということでご了承した。

知床五湖地区における取り組みに関連して、通信環境の充実はこの検討会議としての総意だということで合意、一方で景観やインフラ整備に係る工事などの影響については、各位と相談しつつ進めることになった。

カムイワッカ地区における取り組みについては、カーフリープロジェクトも含めて報告いただいた。カーフリープロジェクトは、新しい試みとはいえ、過去何年も検討してきた結果であり、今後もぜひ推進していただきたい。ただし、管理及び利用の促進に与える影響を整理する上で、もう一度目的を明確にしてご説明を願う。

関連して、一の滝から奥の利用については、カムイワッカ部会で検討を進めていただくが、検討の内容を次回のこの場で報告いただく。内容に問題なければ、その場で決定を承認するが、問題があれば再度検討をしていただく。

ウトロ海域における取り組みでは、近くハンドブックの改訂に着手することだ。

「その他」の項目として、長期モニタリングについては説明と調査結果を報告いただいた。この間の各位のご協力に御礼申し上げる。

「知床国立公園利用のあり方に関する行政間会議」の項では、将来的なゾーニング案をお示しいただいたが、今後の国立公園の管理、世界自然遺産地域の管理にも影響する内容であり、今後の進め方、当該ゾーニングプランの位置づけや導入の仕方などを今一度整理していただき、次回以降継続検討する。

また、アドベンチャーツーリズムとガイド資格について、道庁と北海道運輸局から説明をいただいた。

以上で私のまとめとする。今回は合意や決定が少ない会議になったが、知床の将来にとって重要な内容を多数含む議論展開となった。今後こうした場面は非常に多くなると思われる。是非積極的にコメントや意見をいただきたい。その点で、先ほど長谷川氏からあったような現場からの声、それに対応する水口氏からの関係組織の方向性といったやりとりは非常に重要になる。是非コミュニケーションをとっていききたい。

まだまだ新型コロナウイルスの影響が続くと思われるが、今後の知床の観光が利用者の満足のいくものとなること、我々地域の関係者にとっても充実したものになることを目指し、各位の一層の尽力を願って会議を終了したい。長時間の各位の真摯な検討に御礼申し上げます。

山田：これにて令和 2 年度知床世界自然遺産地域科学委員会適正利用・エコツーリズム検討会議を閉会する。

以上